20028

冠動脈 CTA 検査における心事故発生の検証

【背景】MDCT による冠動脈 CTA 検査(C-CTA)において、狭窄度の評価は心臓カテーテル検査(CAG)と同等とされている。64 列 MDCT による冠動脈狭窄病変の検出能は、感度(sensitivity)が 83～97%、特異度(specificity)が 90～99%、陰性的中率(negative predictive value: NPV)95～100%と報告されている。特に NPV が高いことで C-CTA で有意狭窄が無ければ、冠動脈疾患を否定できるとされている。【目的】C-CTA を行い有意狭窄無しと診断された症例において、臨床的帰結について検証を行った。【対象】対象は 2 施設で検査を施行された症例で、2008 年 4 月～5 月に 64 列 MDCT で C-CTA を撮影した 321 例中、冠動脈有意狭窄を 51%以上とし、狭窄無しと診断された 136 例 (描出不良により診断を行えなかった症例を除く)。【方法】対象症例において、2013 年 5 月までの 5 年間で心事故発生の有無を検証した。【結果】今回検証を行った症例においては、5 年間での心事故発生は認められなかった。再度 C-CTA を行った症例は 9.6 %(13 例)で、有意狭窄は認めなかった。同じく CAG を行った症例 8.1%(11 例)においても、全症例で有意狭窄は認めなかった。またその内の 7 症例においては冠攣縮性狭心症と診断され、そのうち 2 例は緊急 CAG が施行されていた。【結論】5 年間での心事故発生率は 0%で、C-CTA の NPV が高いことが証明された。